

## MJIIT と私



井草邦雄

マレーシア日本国際工科院教授（技術経営担当）

立命館アジア太平洋大学名誉教授

MJIIT と私との関わりは、前身である MJUC（マレーシア日本大学センター）時代の約 3 年半、MJIIT 開校後の滞在 2 年を加えるとほぼ 5 年半になる。今回、担当分野である「技術経営」分野のコース準備が完了し一段落することから、MJIIT での勤務を終え日本に帰国することになった。この間、日本とマレーシアの学术交流の一端を担うことができたことには誠に感慨深いものがある。また、MJIIT が紆余曲折を得ながらも UTM の一機関として開校以来わずか 3 年で、日マ教育・研究の場として立派に成長し、内外の評価を得ていることに喜びを感じる一人である。

おもえば、マレーシア東方政策の一環として企図されたマレーシアでの日本式工学教育の拠点「MJIUT」（マレーシア日本国際工科大学）の設立準備に協力するため日本政府から要請され、現地に赴任したのは 8 年前の 2006 年の 5 月であった。その前年にはすでに「準備室」が開設されていて、責任者として故マルズキ教授が就任していた。また、当時、日本側からは、日本人専門家として機械工学分野で九州大学の木下教授、電子電機分野で東海大学佐藤教授、立命館大学から技術経営・ビジネス分野で私が派遣され、同年から大学設立準備がはじまった。

大学準備室であった MJUC は、現在の UTM-KL キャンパスの一角に小さな事務所を構えており、マルズキ所長を中心に、アジザン教授 (UPM)、そしてアジア教授 (現 MJIIT) と私たち 3 人の小所帯による小さな船出であったこと思い出す。

仕事の中心は、大学の骨格や理念、学科構成、カリキュラム開発、人材計画、財政など多岐にわたっていた。こういった中で MJIUT のブループリントに当たる文書を 2007 年に完成させたが、これが現在の MJIIT の土台になっていると信じている。

当時、日本人の 3 人の間で、日本式工学教育や講座制の是非、日本とマレーシア教育制度の良否、研究体制、産学連携のあり方、日マの学术交流、日本の大学国際化への貢献など熱っぽく語り合ったことを思い出す。また、マルズキ教授の強力なリーダーシップのもと、集中的なワークショップや会議を通じてこれらの議論も深めていった。

こういったことが、現在の MJIT の基本になる「iKOZA」を中心とした研究・教育概念、「知情意」や「人間力」育成の教育理念、日マ教員の教育・研究協力、アセアン大の工学教育拠点形成、技術教育と経営教育の融合と産学連携の枠組みとして一定のかたちとなって生きたと考えている。特に、木下・佐藤教授からは、日本にある「大学共同利用施設」にあるような自由で開かれた研究体制の構築（例えば先端電子顕微鏡施設）や「講座制研究体制」、私からは、日本の優れた産業技術とその形成の歴史を実感できる「産業博物館」設置などを提案し、それぞれ実現されたことは喜びにたえない。

現在、これらの基盤の上、日本人教員は20体制となり、マレーシア教育教員80、学生数600人、研究グループ15(iKOZA)、JICAの強力な支援による施設整備などが進み、大学施設としての体制が進みつつある。また、MJITを支えるコンソーシアム大学も25大学と拡大し、広く日本とマレーシアの研究・教育協力の場ともなっている。特に、筑波大学は、2013年 MJIT の中に「拠点事務所」を設置し、東南アジアでの研究拠点として位置づけようとしている。今後、こういった動きは日本の大学のグローバル化志向とも相まって、MJITを拠点とした研究や教育の交流はますます進むであろう。

私自身は、今年4月に日本に帰国するが、これら研究・教育の充実を通じた今後の MJIT 発展の姿を見るのが楽しみである。